

試験研究成果普及情報

部門	病害虫	対象	普及
課題名：薬剤耐性キュウリ褐斑病菌の発生			
[要約] アゾキシストロピン耐性キュウリ褐斑病菌が蔓延しているため本剤の使用を中止する。ジエトフェンカルブ・プロシミドン耐性菌、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル耐性菌も発生しているため両剤の使用に注意する。			
リーキーワード：キュウリ、褐斑病、耐性菌、アゾキシストロピン、ジエトフェンカルブ			
実施機関名	主 査	農業総合研究センター生産環境部病理研究室	
	協力機関	各農林振興センター	
実施期間	2004 年度～2005 年度		

[目的及び背景]

アゾキシストロピン剤（商品名：アミスター20 フロアブル）、ジエトフェンカルブ・プロシミドン剤（商品名：スミブレンド水和剤）、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル剤（商品名：ゲッター水和剤）は、褐斑病に対して高い防除効果があるため、多くの地域で使用されてきた。しかし、一部地域で防除効果の低下が疑われる事例が発生したため、これらの薬剤に対する感受性を検定した。

[成果内容]

- 1 2004 年 4～6 月に旭市、茂原市等 4 地域 10 圃場の促成栽培キュウリを対象に、2004 年 10～11 月に君津市、八日市場市等 9 地域 22 圃場の抑制栽培キュウリを対象に、それぞれ調査を行った。
- 2 アゾキシストロピンを含むストロビルリン系剤（アゾキシストロピン及びクレソキシムメチル：商品名：ストロビードライフロアブル）の散布回数は、促成栽培で平均 2.8 回、抑制栽培では 0.9 回であるが、5 回以上使用している圃場もある。アゾキシストロピン耐性菌率は、促成栽培で 100%、抑制栽培では 76.7% である（表 1）。
- 3 アゾキシストロピン剤の感受性菌に対する防除効果は非常に高いのに対して、耐性菌に対する防除効果はほとんど認められない（写真 1）。
- 4 ジエトフェンカルブ・プロシミドン剤の散布回数は、促成栽培で平均 2.1 回、抑制栽培で 1.0 回である。同耐性菌率は促成栽培で 23.9%、抑制栽培では 55.9% である（表 2）。
- 5 ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル剤の散布回数は、促成栽培で平均 0.3 回、抑制栽培で 0.6 回である。同耐性菌率は促成栽培で 23.9%、抑制栽培では 40.7% である（表 2）。
- 6 これらの結果から、当面、ストロビルリン系剤の使用を中止し、ジエトフェンカルブ・プロシミドン剤及びジエトフェンカルブ・チオファネートメチル剤の使用も必要最小限（いずれかを 1 回以内）とする。

[留意事項]

アゾキシストロピンとクレソキシムメチルはストロビルリン系剤に属し、薬剤の作用機作は類似しているため、アゾキシストロピンに耐性の菌はクレソキシムメチルにも耐性であると考えられる。

ジエトフェンカルブ・プロシミドン（チオファネートメチル）耐性菌とはジエトフェンカルブとプロシミドン（チオファネートメチル）の両剤に耐性の菌であることを示す。

[普及対象地域] 県下キュウリ栽培地帯

[行政上の措置]

[普及状況] 主要産地におけるストロビルリン系剤の使用量は減少している。

[成果の概要]

表1 作型別のストロビルリン系剤散布回数とアゾキシストロピン耐性菌の発生状況

作 型	散布回数*	供試菌株数	耐性菌率 (%)	採集地域
促成栽培	2.8 (0~7)	32	100	旭市・茂原市・君津市・野栄町
抑制栽培	0.9 (0~5)	43	76.7	佐倉市・君津市・八日市場市他

注) * 平均値 (最少値~最多値)

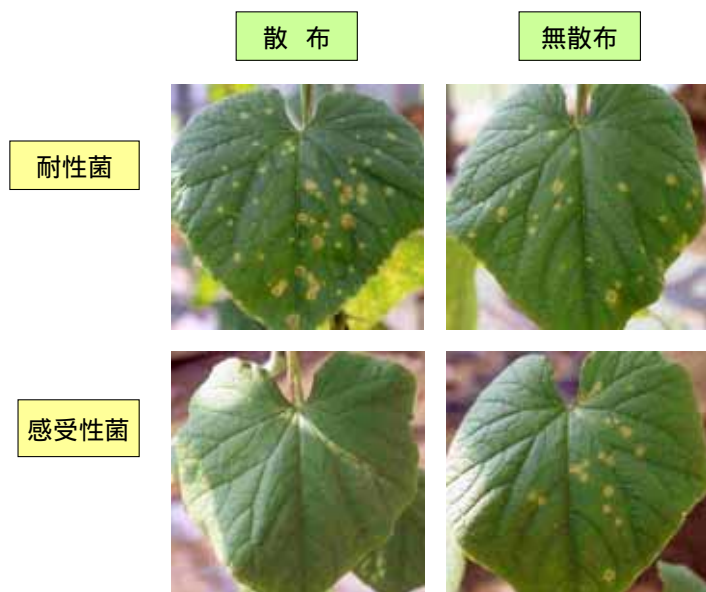


写真1 耐性菌及び感受性菌に対するアゾキシストロピン剤の防除効果